

絵画修復家のアトリエから

加賀優記子……絵画修復家

に、良かったですねえ、間髪いれずに返す事が出来て。

次の日は、違う画商サンから送られてきた、またしてもローランサンの小さなデッサン。ああ、また、違うってばあ！ 一目瞭然で、なんだかとてもヘンなのに。

そして今日は平山郁夫画伯の水彩画というものが……。値段を聞いてびっくり。家を買えそうだな。でもねえ、これ、水彩じゃないなあ。だってグラビア印刷のドットが見えるもの。リトグラフでもなくて、殆どポスターに近いものです。いつ買ったんですか？

え？ バブル初期め？ あーあ。すっかり前の事なんですわ……。

去年は油絵で、ローランサンとフジタの贋作がやってきた。ローランサンは、絵の具が割れて出



(上) マリー・ローランサンの贋作。
(右) 手の部分。細かい亀裂が針の先で削って作られている。



来る亀裂が針の先で作ったものだったし、フジタは特徴的な透けるように薄い彼の作る神業のような下地が、この贋作ではもったりと厚くて、やはりご丁寧に亀裂を走らせるのにカッターで表面を傷つけてあった。でも、残念ながらこれが致命傷。だって顕微鏡で見ると、この傷つて失敗をやり直して同じと何度も切っているんだもん。バレバレじゃあないですか。

不謹慎な言い方だけど、私はいつも贋作を見つけるとなんだかアドレナリン値がちよっと上昇して興奮しちゃう。贋作だと、修復依頼は断らなければならぬので、基本的には残念なだけけれど、アトリエで贋作作品と一人対面していると、これを密やかに作った人物の手つきや姿を想像してしまふ。社会のどこかでうごめいている、このようなルートの商人達。

よく考えてみると目の前に犯罪の証拠がデント存在している訳なのに、怖いような、しかしなんだか滑稽なような。

よく聞く話では、市場に流通している絵画の三分の一が贋作なのだそうす。

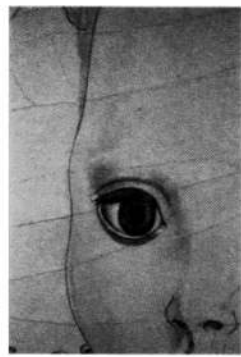
何百年も昔から続く世界規模のババ抜きに踊る人々。そのハザマに自分が立っていて、でも私のなんと非力な事！ いくらこれは偽ですよ、と言ってもこのババはきつといつかは回っていつてしま

まうだろう。この世に欲望がある限り。まして私たちは修復家には鑑定書を書く権威は無いのだから。そして世の中には信じられないほどの怪しい鑑定書が存在しているのだ！

どこかで最近お気に入りの版画を買った方、ちよっとお安く掘り出し物を見つけた！ これですれしめひと儲け、なんて考えているあなた、よくよく鼻先を近づけて見てみましょう。ほうら、ドットが見えませんか？ 青紫色がマゼンタと青の点々で出来ていたりして。

でも、もしその絵がほんとお気に入りなら、一生大事にその前でお茶を飲んだついでいいんです。あなたがシアワセなら、その絵には本当の意味での存在価値があるのだから！

以前に東京でタクシーを拾った時の事。その日は大きな箱に入った何千万円もする修復のため預かった絵を持っていた。運転手のおじさんが、興味深そうに、「その包みはお嬢さんが（まあ、お嬢さんだなんて言ってくれてありがとう）描いた絵か何かかい？」と聞いてきた。私がそうだと答えると、「おじさんはね、この間ポリーナスも貯金もみんなはたい一枚の版画を買ったんだ。そう、知っているかな、綺麗な海の絵を描くあの作家だよ、〇〇万円もしたけどね。そりゃあ、家族



(右) 真作のフジタ・ツグジ作品。下地が薄く、亀裂もそれに相応して細い。
(左) フジタ・ツグジの贋作。下地が厚く、カッターで切った作られた亀裂だという事がよく判る。



はおどろいたさ、カミサンはしばらくショックを受けてたな。でもさあ、今は家族がみんなそいつのお蔭でとっても良くなったんだよ。まず、息子や娘は俺を尊敬してくれるようになった。こんな高いすごい絵を買って来るような父親で、鼻が高いって言うんだ。それに、何てったて毎朝気持ちがいいんだよ、すがすがしい絵だろう？ 家族みんなで朝ご飯の時も夕ご飯の時もウレシイねえっていつて食べているんだよ。」

その絵の値段は、べらぼうに高かった。たぶん、どこかで吹っかけられてしまったんだろう。でも、私はそんなこと言わなかった、モチロン。嬉しそうにご飯を食べている家族の姿を思い浮かべて、少し禿げかかったおじさんの頭の後ろを眺めていた。

かがゆきこ●絵画修復家。大学卒業後、絵画の古典技法を学ぶためにパリに留学。ルーブル美術館の絵画修復員を経て、現在は鎌沼で修復工房を主宰。